

## [研究論文]

## 物質的想像力と認識論的障害

北村知之

本稿は、バシュラールが『水と夢』において提起した物質的想像力および物質的イメージという概念についての解釈を、『科学的精神の形成』に見られる認識論的障害との関係において試みるものである<sup>1)</sup>。

『水と夢』において、質料 (matière) と形相 (forme) という歴史的な対概念を踏まえて提起された物質的想像力および物質的イメージは、この対概念に基づくだけではその輪郭が十分見えてこないように私には思われる。そこでまずはじめに、前提となる質料と形相という枠組みの中での物質的イメージの理解を試み、それが不十分なものであることを示す。続いて、バシュラールの科学論および認識論的障害の議論を参照することによって、それらの議論が物質的イメージの理論と相関関係にあることを示す。加えて認識論的障害が物質的イメージの普遍性を支持するものとなるという解釈も提示する。

## 1. 『水と夢』における物質的想像力

上述のようにバシュラールが物質的想像力という概念を提示したのは『水と夢』においてである。そこでは物質的想像力は形相的想像力と共に一対のものとして提示されている。そして物質的想像力に対応するイメージは物質的イメージとされ、形相的想像力に対応するイメージは形相的イメージ (l'image formelle) だとされるのである。このことについてバシュラールは、『水と夢』の冒頭において、次のように記している。

「われわれの精神における想像する力 (les forces imaginantes)<sup>2)</sup> は、二つのまったく異なる軸に沿って展開する。

一方は、新奇なものを前にして飛躍するものである。それらは、絵画的なもの、多様なもの、予期せぬ出来事を面白がるのである。これらの力によって活力を与えられる想像には、描くべき春がいつも存在している。これらの想像する力は、われわれから遠く離れたどこかに、じつに生き生きと、花々を産み出すのである。

もう一方の想像する力は、存在の底 (le fond de l'être) を掘り下げるものである。そして存在の中に、原初的なもの (le primitif) と永遠なるもの (l'éternel) とを同時に見出そうと

---

受理日 2004. 5.18

所 属 福井県立大学学術教養センター

欲している。これらの力は、[前者のように春ではなくて] 季節と歴史を支配するものである<sup>3)</sup>。こちらの想像する力は、われわれの内部にも外部にも、どこにでも、胚種 (des germes) を産みつけるのである。これらの胚種を通じて、形相は実体 (substance) の中へ入り込むのであり、また形相が内なるものになるのである (la forme est interne)。

これをただちに哲学的に表現するとすれば、二つの想像力が区別されよう。すなわち形相因に生命を与える想像力と、質料因に生命を与える想像力である。これをさらに短く言えば、形相的想像力 (l'imagination formelle) と質料的 [物質的] 想像力 (l'imagination matérielle) である<sup>4)</sup>。

バシュラールはまず形相的想像力と物質的想像力についてそれぞれレトリカルな表現で述べた後に、哲学的に両者を要約しているのである。形相的想像力については、それが新しさや絵画性、多様性、意外性を特徴とすることを指摘し、それによって産み出されたイメージがわれわれから離れたものであることにも言及している。一方、物質的想像力については、「存在の底」「原初性」「永遠性」「実体」「内部」といった形而上学的色彩を帯びた言葉によってそれを形容している。これらの語およびその類語は、物質的イメージの属性としてその後頻出することになるものである。しかしながら、こうした形容語は、物質的イメージのいくつかの特性を羅列的に知らせてくれはするが、そこから直ちに物質的イメージを全体的に理解したり、全体像を捉えることは困難である。その意味で、「哲学的に」理解できるものとは言い難い。バシュラールが「哲学的」に述べていることといえば、「形相因に生命を与える想像力と、質料因に生命を与える想像力」である。これはほとんど同語反復的な説明であり、それぞれの想像力の全体的な輪郭を得るには不十分であるし、その本質を十分に伝えるものとは言いがたい。けれども、この形相因と質料因に基づく用語法が物質的想像力や物質的イメージについてのとりあえずの理解をもたらすということも事実である。まずはこの質料因と形相因の対比を手がかりに、物質的想像力に迫ることにしたい。

## 2. 形相因と質料因

まず注意しておきたい点は、質料と形相という対概念を理解することによって、そこから機械的に物質的想像力と形相的想像力とが理解できるように思われるということである。つまり物質的想像力と形相的想像力とは、対概念として提唱されているため、われわれは両者を対称的な形で一挙に理解できるように思いがちなのである。しかしこれは錯覚であり、誤解である。この誤解とは如何なるものであるか。質料と形相との関係だけに注目して物質的想像力について思弁を働かせるとどうなるか見ておこう。

われわれは存在している物が材料＝質料と形式＝形相からできていると考え方には十分慣れていると言ってよいであろう。とりわけ身の回りにある人工物は、建築物であれ自動車であれ、

## 物質的想像力と認識論的障害

いずれもこうした材料と形式の統一として理解される。原材料を加工して一定の形式に整え、それらをしかじかの形へと組み立てることによって、そのものが作られるのである。

このような形相と質料の関係のもっとも解りやすいモデルとしては、鑄型に流し込んで作られる鑄造物のようなものが適切である。鑄型が形相を提供し、そこに流し込まれる銅や鉄といった金属がその質料を提供する。こうした例においては、われわれはいとも簡単に、形相と質料をそれぞれ独立のものとして理解してしまう。つまり知的に理解できるだけでなく、感覚的にも両者のイメージをとらえることができるのである。同じ鑄型に異なる金属を流し込めば、質料は異なるが形相は同一の物が出来上がり、逆に、同じ金属を形の異なる別々の鑄型に流し込めば、質料は同じで形相が異なる物が出来上がるからである。

このようなモデルにおいては、同じ鑄型を用いても、流し込まれたものがブロンズであるか石膏であるかによって、われわれが思い描くイメージには明らかな違いが生じるものである。素朴に考えれば、このようなケースにおいてブロンズや石膏という物質について思いを巡らす想像力が物質的想像力であると言えるかもしれない。形相と質料という対概念にもとづいた物質的想像力の解釈は、まずはこのように定式化されるはずである。

なおこのようにブロンズであれ他の素材によるものであれ、鑄造物が形相と質料の二元論的枠組みにおいて考えられるとき、鑄造物が形相と質料とに還元されたと表現することができよう。すなわち、質料だけに注目すれば、ブロンズ像はブロンズへと質料的に還元されるのである。

では質料というものをこのように或る特定の物質に還元して理解した時に、その物質的想像力が思い描くとするイメージは、ほんとうに質料的なものと言えるだろうか。たとえば、上のような例で質料とみなされるところのブロンズは、それ自体に注目した時に、はたして質料という語に相応しいものであるか否かについて考えてみる必要がある。

ブロンズという金属に改めて注目してみよう。すると今度は、ブロンズという物質も、それはそれで質料と形相からなっていることにすぐに思い至るはずである。というのも同じ金属であってもブロンズがブロンズであって鉄でないのはなぜかと言えば、ブロンズが鉄とは異なる形相を有しているからである。今日のわれわれは、この形相がなんであるかを知っている。ブロンズは錫や銅の原子からなるものであり、鉄は鉄の原子からなるものである。いずれの金属原子についても、それらを構成するのは陽子や中性子や電子といった素粒子であり、その意味ではブロンズも鉄も同じ質料からなる同じ物質だと言えるのである。それゆえ両者の違いは原子構造という形相の違いに求められるのである。そうであれば初めに物質的なものとみなされたブロンズや鉄のイメージとは、正確に言えば、実は共通の質料からなる異なる形相に負うものであり、それゆえ質料的イメージと言うべきではなく、それはそれでまた一つの形相的イメージだと言うべきものなのである。

また鑄造物のような典型例ではなく、その他もろもろの工作物については、この事情がいつそのことであることがわかる。アリストテレスにならって家を例にとってみれば<sup>5)</sup>、そこでは材木や屋根瓦などが家の材料つまり質料となっており、それらを特定の形に整えて組み合わせることによって形相をそなえた家が造られる。しかし家の材料とされる材木や瓦をそれだけ単独で取り出してみれば、あらためてそれはそれで形相と質料をそなえた独立の対象となるのである。したがって、われわれがそれら個別の対象をそのものとして認識するのは、それらの形相によってであると言えるだろう。

結局のところ、質料と形相との関係はこのようにきわめて相対的なものであってみれば、或る特定の何かを指し示して、それを質料とみなすことはできないということになる。

にもかかわらず、質料と形相の関係をあえて質料の側へと還元し続けてゆくのであれば、あくまで論理的な要請として、最終的には第一質料的なものへと至ることになるだろう。けれども、この第一質料的なものとはどういう性質を持つものかといえ、それは端的に存在するものというきわめて抽象的なものとなる。第一質料は、その抽象性の故に、考えることはできても、それについての具体的イメージをもつことが不可能なものなのである。

質料と形相の関係がこのようなものであるとすれば、この関係に基づくバシュラールの物質的想像力や形相的想像力という概念はどのように理解されるだろうか。鑄造物の例におけるブロンズや鉄という材質のイメージにしても、それはそれで形相的イメージなのであるとすれば、物質的イメージと呼ぶにふさわしいものは第一質料以外に有り得ないということになる。しかし第一質料とは、上で述べたように、それについてのイメージを持つことのできないものなのである。あえてこの論理の中で物質的想像力に意味を与えるとすれば、それはせいぜい、或る事物を対象とした時に、質料的な方向へと意識を向けようとする想像力ということになるであろう。そこには質料を求める想像力の志向性があるだけで、肝心の質料のイメージは不在ということになる。

結局、「水と夢」の冒頭に見られる形相と質料という対概念に基づいたバシュラールの「哲学的」な物質的想像力の説明では、物質的想像力や物質的イメージという言葉の意味は十分に理解できないのである。この難点に対処するためには、物質的イメージを形相的イメージとの対比において取り上げるのではなく、むしろそれ自体を単独で独特なイメージとして捉える方途を考えるべきであろう。

### 3. 物質的イメージとしての元素、その感性的性質

バシュラールが物質的想像力の対象として、つまり物質的イメージとして具体的に取り上げているものは何か。形相對質料という対関係を踏まえながらも、バシュラールが著作の中で実際に言及しているのは、上記のような第一質料として解釈される一般的物質のことではない。

## 物質的想像力と認識論的障害

実際にそこで主題化されているのは、火であり、水であり、大気であり、また土である。いわゆる地水火風の四元素が問題になっているのであり、けっして第一質料のようにいかなる性質も持たない無限定なものとしての物質が問題とされているのではない。けれども、それらは元素とみなされているかぎり、依然として、それ以上には還元することのできない根源的物質という意味が込められているということも確かである。質料サイドへの還元がそれ以上不可能であるという意味での根源性が元素には認められているのだ。では、地水火風のような元素が、同じく根源的な質料であるにもかかわらず、第一質料と異なる点は何か。

元素とは古代より万物の根源を成すものとして信じられてきた根源的な物質のことであるが、古代ギリシアにおいては、同様なものとして原子（アトム）という概念もあったことをここで想起しておこう。根源的物質としてバシュラールが論じているものが、元素であって、原子ではないという点が重要なのである。元素＝エレメントも原子＝アトムも古代ギリシアに遡る概念であって、ともに物質の根源的な姿として想定されているものであるが、両者の間には大きな違いが認められるはずである。

原子とは、それ以上分割できないものという本来の意味からも明らかなように、推論によって考案されたものであり、そのかぎりにおいてきわめて抽象的な概念である。それは第一質料のようにまったく抽象的にしか考えられないというものではない。それは微小な粒子としてのイメージを描くことのできるものではあるが、しかし日常的な感覚世界において直観することはできないものである。これに対して、元素とは、地水火風の四元素がそうであるように、まずはわれわれの日常的世界において経験されるものであり、通常感覚において捉えられるものである。つまり根源的質料としての原子と元素は、それぞれ根源性あるいは原初性という特性を共有しながらも、通常感覚によって捉えられるか否かという点で、決定的に意味が異なっているのだ。それゆえ元素の特徴とは、われわれの日常感覚によって捉えられるという感性的特質を保持したままでおかつ根源的質料として考えられるという点に求められる。

さて、バシュラールの物質的想像力の理論においては、このような元素としての物質〔質料〕概念が前提されているわけだが、われわれにとっての関心事は、この物質概念の普遍的意義はどのように確保されるのかということである。というのも、四元素論というものはるか昔の非科学的理論であるにもかかわらず、そしてそれをバシュラールも十分承知しているのに、彼はこの四元素の話の古代や中世の概念史として語っているのではないからである。つまり彼はこれをあくまで今日的な意義や有効性をもつものとして語っているのである。それは、想像力の理論、あるいは詩的イメージの理論における意義や有効性であるが、その現代的意義を主張する点においては変わらないのであり、それゆえわれわれとしては、その今日的意義を問わなければならない。この物質概念がバシュラールの恣意的な用語法にすぎないという誹りを

避けるためには、それ相当の普遍性が何らかの形で根拠づけられなければならないであろう。

実際には、『水と夢』をはじめとするバシュラルの詩論を読みながら読者が自分の経験にそれを照らしながら納得するということもあるかもしれない。そしてそのかぎりでバシュラルの言説はすでに十分有効なものだと言ってよい。しかし物質的想像力の理論が想像力やイメージの理論としてより説得力を持つためには、やはり物質的想像力という概念を取り囲む理論の枠についての理解が必要となるはずである。このような問題構成において有効な足場を提供すると思われるのが、次に見るバシュラルの科学論および認識論的障害の議論である。

#### 4. 科学的認識と認識論的障害

『科学的精神の形成』（以下『形成』）は、科学的精神を積極的な主題とするものであるが、そこではもっぱら科学的精神の形成を妨げる障害の有様がさまざまな事例を参照しながら論じられている。そしてその内容は、物質的想像力や物質的イメージに関心をもつわれわれにとっては実に興味深いものとなっている。というのも、そこでの認識論的障害についての記述は、それが障害として否定的に論じられている点を別にすれば、物質的イメージのそれとほぼ重複するものとなっているからである。しかもこの著作は、バシュラルの四元素の想像論が提示される直前に著されたものであり、時期的にもその内容が四元素論の思想と深く関わっていると考えられるのである。

それゆえ次にわれわれが検討するのは、この認識論的障害の概念であるが、しかしその前に、認識論的障害がまさしく障害となるところの科学的認識をバシュラルが如何なるものと考えていたかについてまず概観しておくべきであろう。

科学的であるためには理性的でなければならない、科学的精神はなによりも合理的精神のことだとバシュラルは考えるのであるが、彼はまた科学的認識は通俗的認識とはまったく異質の認識であるとして、科学的認識と通俗的認識との断絶を強調している。物理学や化学のような科学は、「今日的发展状況においては、通俗的認識 (connaissance vulgaire) とはっきり手を切る思考の諸領域として認識論的に特徴づけられる<sup>6)</sup>」と言うのである。またバシュラルは、『形成』の冒頭において次のように書いている。

「表象を幾何学的にすること、すなわち現象を素描して、経験の決定的出来事を連続的に秩序づけること、これこそが科学的精神が確立する際の最初の課題なのである<sup>7)</sup>」。この幾何学化は、具体的で感性的な経験を抽象化することであり、科学的精神とはこの抽象化を理性的に進める精神のことなのである。しかしこの抽象化は幾何学的表象で終わるものではない。幾何学的表象も、その図式性ゆえに、依然として空間的属性の素朴实在論に基盤をおくものであるがゆえに、抽象化を求める科学的精神の眼差しはさらにその先に向かうことになる。すなわち

## 物質的想像力と認識論的障害

「直接、表面に現れている計量的関係に比べればそれほど繋がりが明瞭でない位相的法則、端的に言えば、なじみやすい幾何学的表象関係よりもさらに深いところにある本質的關係<sup>8)</sup>」を探求するのである。空間や現象の下にある本質的關係、それはバシュラールによれば数学的世界なのであるが、それこそが科学的精神の目指すところなのである。そしてこうした抽象化の歩みにこそ、バシュラールは科学的精神の本質を見出すのである。

このような科学的精神の発展をバシュラールは3段階に区分している。

第1段階は、具体的段階 (l'état concret) にある精神。

「精神は現象の最初のイメージ (des première images) に興じており、自然 (la Nature) を賛美する哲学的文学 (une littérature philosophique) に依拠している。その哲学は、世界の統一性 (unité) と世界の豊かな多様性 (diversité) とを奇妙にも共に歌い上げているのである<sup>9)</sup>」。

第2段階は、具体的かつ抽象的な段階 (l'état concret-abstrait) にある精神。

「精神は、物理的〔身体的〕経験 (l'expérience physique) に幾何学的図式 (des schémas géométriques) を付け加える。そして単純性の哲学 (une philosophie de la simplicité) に依拠する。精神はまだ逆説的状況の中にある。すなわち精神は、この抽象が感性的直観 (intuition sensible) によって明瞭に表象されればそれだけいっそう、自らの抽象作用を確かなものと思いこむのである<sup>10)</sup>」。

第3段階は、抽象的段階 (l'état abstrait) の精神。

「精神は、現実空間の直観 (l'intuition de l'espace réel) を意図的に免れさせられた情報、つまり直接的経験から意図的に分離された情報を獲得しようとする。そしてさらに、最初の現実という常に不純で常に不定型 (informe) なものに対して、偏見なき論戦に入っ

てゆくのである<sup>11)</sup>」。

このように科学的精神あるいは合理的精神は、まずはイメージから出発して、幾何学的形式へ至り、そこからさらに抽象的形式へ至ることによって形成されてゆくものとされている。

われわれがここで注目するのは第1段階の精神のあり方である。具体的段階にある精神が対象としているのはイメージである。つまりこの段階において精神は対象を感性的なものとして表象するものなのである。しかもこの精神は大文字で記される自然 (la Nature) を讃える文学に関わるものだとも言われている。「最初のイメージ」といい、「大文字の自然」といい、さらに「哲学的」・「統一性」・「多様性」、いずれもバシュラールが後に物質的イメージに帰するところの諸性質を表すものばかりである。むろんこれら物質的イメージに帰される諸性質は、科学的思考においては克服されるべきものとして位置づけられるものであるが、われわれにとって重要なことは、物質的想像力と科学的精神の発展における第1段階とが対応関係にあるように見えるという点である。

さて、この第1段階から第3段階の科学的精神への発展は、人間の経験が増えるのに比例して、あるいは時間の経過とともに、切れ目なく成し遂げられるものではない。科学的認識の進展の過程では、科学的精神は常に自らに対する抵抗 (*résistance*) に会うことになる。それは単なる技術的な未発達というような物理的な条件による障害だけではない。バシュラールによれば、科学的精神の形成に対するもっとも注目すべき抵抗とは、われわれの外部にある諸条件ではなく、人間の精神そのものに内在する障害である。人間の精神そのものの内側に、合理的な思考を妨害し科学的認識の成立を妨げる障害が潜んでいるとバシュラールは指摘するのである。そしてこの内在的障害を術語化したものが、認識論的障害 (*l'obstacle épistémologique*) なのである。

【形成】においてバシュラールは、認識論的障害としていくつものパターンを挙げてはいるが、大別すれば、三ないし四つの項目において理解することができると思われる。すなわち、「最初の経験」、「一般的認識」、「実体論的障害」の三つ、あるいはこれに加えて「アニミズム的障害」を別に立てることもできよう。以下、これらの認識論的障害が具体的にどのように語られているかについて概観することにしたい。

## 5. 認識論的障害

### 【最初の経験】

認識論的障害としてバシュラールが第一に挙げるのは、最初の経験 (*l'expérience première*) あるいは最初の観察 (*l'observation première*) なるものである<sup>12)</sup>。

ある自然現象についてわれわれが最初にした経験とは、理性による批判的検討を受ける前の直接的な経験のことである。バシュラールによれば、何であれ経験というものは、最初の印象が強烈なものであればあるだけ、その経験についてのわれわれの理解にいつまでも影響を与え続けるものであり、理性的批判の目を曇らせることになるのである。

この「最初の経験」においてわれわれが注目すべきことは、これが直接的なものであるということ、つまり感性的なものだということである。バシュラールは、「最初の経験」が強烈であることを強調しているわけだが、しかしそれが強烈であるのは、それが感性に直接訴えてくるものだからである。

ちなみにバシュラールは、このような直接与えられるものに依拠する哲学を、感覚主義あるいは感性主義 (*sensualisme*) と呼んで、科学的客観的認識の根拠としては認めないという立場を明らかにしている<sup>13)</sup>。バシュラールがベルクソン哲学に鋭く対立したことはよく知られているが、この直接性というテーマは両者の大きな対立点の一つとなっている。

直接性に根拠を求める感性主義は、たとえ客観的認識においては排除されるべきものであるにしても、想像論の分野においては、先の元素の特徴が感覚性にあったということに対応して、



## 物質的想像力と認識論的障害

最大の特徴を示すものであると言ってよいだろう。認識論的障害として最初に指摘されるこの感性的特性は、物質的イメージの基礎を成す感性的特性に通じるものと解されるのである。

## 【一般的認識】

第2の認識論的障害は、一般的認識 (la connaissance générale) と呼ばれる。

非科学的な精神は、第一の障害に見られるように、感性的な印象に囚われ、その現象に執着するものであるが、同時にまたそこから逆方向に転じて短絡的な一般化を行うこともしばしばである。その結果として得られる一般的認識あるいは普遍的認識もまた新たな認識論的障害となる。つまりあまりにも明快で完全な一般法則というものは思考を停止させてしまうものなのである。

例えば、凝固 (coagulation) という主題が一般化されてしまうことによって、どのようなことが起こったか。バシュラールは、近代科学以前の段階では、凝固という見出しのもとに、多岐にわたる様々な現象が一括して語られていたことを指摘する<sup>14)</sup>。そこでは、乳、血、胆汁、油脂の凝固作用が研究され、さらに溶けた金属の固体化、ついには水の氷結までもが同じテーマで論じられたのである。また樹木の樹液が木質となり、消化された食べ物ががっちりとした身体をつくってゆくのも、すべて凝固作用で説明されたという。一般化が、細部に対する眼差しを曇らせ、精密な記述を妨げてしまったのである。細部や精密さへのこだわりこそが科学的思考には求められているのに、一般化という認識論的障害がそれを阻害してしまったのだ。

この一連の論証の中でバシュラールが取り上げた例の一つとして、乳と血の類似性があるが、これはわれわれの観点からは非常に興味深い例である。『形成』では、乳と血の共通の特性に注目することによって両者が本質において同一視されてしまい、その結果、両者の微妙な違いが無視されてしまうという問題が指摘されていた。細部の正確さを無視することが科学的思考を阻害しているとされたのである<sup>15)</sup>。しかし『形成』において否定的に取り上げられた乳と血は、『水と夢』においては、両者ともに水という元素のイメージの変種として積極的に捉えなおされることになるのである<sup>16)</sup>。水にかぎらず、いわゆる四元素説というものがこの種の過剰な一般化の産物であることはあらためて指摘するまでもないであろう。

バシュラールはまた、こうした「手っとり早くて解りやすい一般化には、…知的な喜びがある<sup>17)</sup>」ということにも注目しているが、これなども四元素の想像力における美的側面として留意しておくべきであろう。

## 【実体論的障害】

認識論的障害の中でも、物質的想像力との関連において、もっとも興味深いものは、実体論的障害 (l'obstacle substantialiste) である。

実体 (substance) とは、言うまでもなく、西洋において古代より哲学の中心的な主題であり続けた概念であり、存在そのものの別名である。実体は、存在するものを下から支える基体 (ヒュポケイメノン) であり、それ以上は分析されることのないそれ自体で独立的に存在するものの名称に他ならない。その意味で、これまで見てきた質料の概念に一致するものではある。ただし哲学史において、真に存在するとされるものは、プラトンのイデアやデカルトのエゴのような例もあり、質料を実体とみなす説が一般的であるとはけっして言えない。したがって、ここでわれわれが実体について確認しておくべきことは、それが存在と呼ばれるべきものの本体として独立自存するものであり、存在と呼ばれるのものにもっとも相応しいものとして了解されるものだということである。

そもそも今日において、実体が何であるかという議論は、もはや現代的なものとして聞くことではない。科学的認識においては実体的な物質観は実効性を失っているようであるし、四元素説も近代科学とは無縁の神話や迷信の類となっているからである。しかしバシュラールが問題にしようとするのは、実体的に事物を捉える思考法がわれわれの日常的思考に深く根ざした傾向であって、これが科学的認識に対してたえずブレーキをかけるものになっているということである。ターレスの水やミレトスの思想家たちの例を持ちだすまでもなく、また洋の東西を問わず、この世界を実体的に捉える傾向は広く人類に行き渡ったものである。その対象は、物体の世界に限られず、人間の魂や精神をも含むものである。いずれの場合においても、実体論は、その対象を一つのまとまりをもった独立自存するものとして想定するものである。こうした思考法が、われわれの日常的思考には常に胚胎しており、それが科学的思考を阻害してきたとバシュラールは指摘しているのである。

認識論的障害としての実体論、実体思考はどのような現れ方をするか。バシュラールは、実体論的障害について最初に次のように書いている。

「実体論的障害、それは他の認識論的障害と同様に、様々な形をとるものである。それはきわめて多様な直観、それどころか対立さえする直観の集まりから成るものである。ほとんど自然的な傾向によって、前科学的精神は、或る対象 (un objet) に、それに関係するあらゆる認識を固着させてしまう。その際、その対象が認識の中でどういう経験的役割を果たしているかについては顧慮しないのだ。前科学的精神は、その実体 (la substance) にさまざまな性質を直接に結びつけてしまう。深い性質も浅薄な性質も、隠れた性質も表に現れた性質も同じように結びつけるのだ<sup>18)</sup>」。

ここでは「実体」という語は「対象」という語と同義的に使われており、物体としてわれわれが直観的に捉えることのできるものすべてを指すものようである。このような実体化は、感覚的に捉えられた直接的性質がそのまま実体の性質として了解されるというやり方で行われるとされている<sup>19)</sup>。また、「あらゆる性質がその実体を呼び寄せる<sup>20)</sup>」とバシュラールは書いて

## 物質的想像力と認識論的障害

いるが、ここで言われる性質とは、人間が感覚的に捉えることのできる性質をすべて含むものである。例えば乾きや粘着性などの性質の他に、悪意などといった隠喩的な性質さえも実体化されてしまうのだ<sup>21)</sup>。

この実体化の具体例を知るためにバシュラールが引用した18世紀の学者の文章は、われわれにも興味深いものとなっている。水についての文章である。

「水はきわめて穏やか (douce) であるために、身体の中のどの部分につけられても、たとえ感覚がもっともデリケートなところであっても、水はいかなる苦痛もひきおこさない。もしわずかの水を眼球につけたとしよう。眼球は苦痛と不快の感覚でもってあらゆる刺戟を検知するに相応しい部分であるにもかかわらず、われわれはなんら不快を感じないのである。水は鼻の粘膜というほとんど神経がむき出しの組織につけられても、いかなる不快な感覚も新たな匂いをも産み出さない。「けっきょく、いかなる刺激物であろうと、それが十分な量の水に溶かされるならば、その物を人体に対してきわめて有害にするところの本性的刺戟を失ってしまうということに、われわれは水のおおいなる穏やかさの証拠を見出すのである<sup>22)</sup>」。

ここでは、水についてのわれわれの感覚的な経験がそのまま水という物質に内在的な性質として理解されていることが解る。「穏やかさ」という性質は、本来は水の隠喩的性質というべきものであるが、ここでは水の客観的性質を表す言葉として用いられているのである。これは「穏やかさ (douceur)」という言葉がそのまま水の実体的性質を表すものと解されることによつて発生する障害でもあるために言語的障害 (l'obstacle verbal) とも言われるものである。しかしそれが実体論的障害の一例であることに変わりはない。

【形成】においてこのような非科学的な論理の一例として論じられる水の穏やかさは、しかし、『水と夢』においては、あらためてまた積極的な意味を与えられているのである。すなわち、穏やかな水 (淡水) という語を含むタイトルの一章が設けられ、そこで詩的に価値あるものとして語りなおされているのだ<sup>23)</sup>。実体論という認識論的障害についても、それが物質的イメージの理論の中で捉えなおされた時には、やはり肯定的な意味が見出されているのである。

## 【内部性とアニミズム的障害】

ところで、この実体論的障害に関連して、特筆しておくべき論点がある。それは実体というものが内部性をもつということである。

「前科学的精神にとって、実体は内部をもつものである。より正確に言えば、実体とは内部である<sup>24)</sup>」。

バシュラールにおいて実体とは、必ず内と外をもつものとして理解されるものである。内部を持つものとして表象されるが故に、実体には、深さ (profondeur) や内密性 (intimité) とい

う特性もまた伴うことになる。そしてそれゆえに前科学的精神は、その内部に向かって実体を掘り下げ (fouiller)<sup>25)</sup>、存在の根底を探り続けることにもなるのである。

この内部性というテーマは、バシュラールの物質的イメージ論の中にくりかえし表れるもっとも基本的なテーマであり、物質的イメージの特性としては最重要のものと思われるものである。実際、バシュラールの詩論が展開するにしたがって、内部的なものへの言及が占める割合は次第に大きくなってゆく。大地論ではこの問題が全面的に論じられているし、さらに『空間の詩学』は、物質性を離れて内部性のみを主題にした著作だと言うことさえできる程である。

実体が内部を持つものとして表象されることによって、その内部には多様な特性が隠されることになる。実体があらゆる性質や認識を引き寄せるといえるのはその内部性ゆえなのだ。実体はそれゆえ内側に何かを隠した存在、つまりオカルト的な存在ともなるのである<sup>26)</sup>。実体がそのようなものであるならば、そのような実体はその内部に秘めるものの一つとして生命が数えられるとしてももはや不思議なことではないだろう。バシュラールは、生命こそが実体の内部に存するもっとも顕著な性質であると指摘している。

「生命 (vie) は、それが活気を与える実体に、誰もが認める価値を刻印している。ある実体が活気を失うと、実体は何か本質的なものを失ってしまう。生ある存在 (un être vivant) から離れた物質 (matière) は、重要な諸属性を失ってしまうのだ<sup>27)</sup>」。

物理的・化学的現象と今では考えられる対象の中に生物学的認識を見て取るという心理、これはあらためてアニミズム的障害 (l'obstacle animiste) と術語化されるものである。このアニミズム的障害と呼ばれる認識論的障害もまた、他の認識論的障害と同じく、物質的想像力の議論においては物質的イメージの積極的な特性として語りなおされることになるのである。『水と夢』の中で、水という物質的イメージと関連させて生と死のテーマがくりかえし語られることになるのも、このように生命を蔵した実体として水が捉えられているからに他ならない。

われわれの見るところ、『形成』において認識論的障害とされているものは、いずれも物質的イメージの諸性質と対応するものであり、両者の間には明らかに相関関係があると考えざるをえない。このことが物質的イメージの何たるかを解釈する上ではおおいに参考になると思われるのである。

## 6. 認識論的障害と物質的イメージ

以上概観したような認識論的障害は、いずれも合理的な科学的精神が自らを実現してゆくのを妨げるものである。近代科学を成立させる合理的精神は、こうした認識論的障害を排し、その時々のお観察および実験手段によって得られる与件に関して抽象的で整合的な推論を働かせながら、その限界内で合理的な認識を獲得する。技術革新によって新たな観察や実験が可能になり、その結果として新たな与件が与えられれば、これを従来の理論に照合しながら、時には新

## 物質的想像力と認識論的障害

たな理論を作って、新しい認識へと至るのである。バシュラールによれば、合理的な科学精神はこれを倦むことなく繰り返すべきものとされる。それゆえ合理的科学的精神は、理論がもたらす対象について、形而上学が行うようなカテゴリーカルな断定をおこなうことはなく、科学的認識はいつまでも近似的認識であり続けるものなのである。

さて、こうした科学的精神に対応する人間の能力が理性と呼ばれるのであれば、その前進を内側から妨げる認識論的障害に対応するものは何と呼ばれるべきか。理性が合理的思考をもたらすものであるのに対して、それを阻害し非科学的認識をもたらすものは何か。既に見たように非科学的認識は、常にイメージという形でもたらされるものであった。それは、思考が抽象的な第3段階に進むのをイメージによって感性的で具体的な第1段階にとどめるものであった。そうであれば、それはイメージを産み出すものであるがゆえに、まさしく想像力と呼ばれるべきものであろう。

また前節において認識論的障害を概観した際に、われわれはその都度、それらが物質的イメージに対応するものであることに言及した。われわれの考えでは、『形成』で扱われる認識論的障害の諸特徴は、『水と夢』を始めとする四元素の想像論における物質的イメージの特徴と重複するものである。物質的イメージと認識論的障害とはいわば同一物における表裏の関係、あるいは反転図形のような関係にあると思われる。それは、理性的であろうとする科学的認識の観点から見れば障害ではあっても、想像力を積極的に捉える詩的・美的観点からは物質的イメージとして肯定的な姿を現すものなのである。それゆえわれわれの文脈においては、認識論的障害を産み出す想像力は、単に想像力一般として解されるべきではなく、さらに限定された想像力、すなわち物質的想像力と呼ぶべきものなのだ。

このように考えることによって、われわれは、物質的イメージを次のようなものとして捉えることができる。すなわち物質的イメージとは、感性的に捉えられ一般化された実体的イメージのことであり、さらに、このイメージには内部性が伴っており、とりわけ生命という属性をその内部に有するものである、と。

また、物質的イメージの普遍性についても次のように言うことができよう。形相的イメージから区別される物質的イメージは、単なる気紛れな想像や自由気ままな想像の産物としてのイメージではない。それはある特定の傾向をもった活動において生じてきたイメージである。すなわち近代科学以前の自然探求の過程の中で探求者たちの心に現象してきたイメージなのであり、自然の根源の探求という活動に強く結びついたイメージなのである。こうした自然探求の中で作用してきた認識論的障害は、人間においてほとんど自然的なものであり<sup>28)</sup>、その意味で人間にとって普遍的なものである。それは一定の普遍性をもったイメージとして現象し、一定のパターンをもって合理的認識を妨げるものなのである。こうした認識論的障害と物質的イメー

ジとの関係が上で指摘したように互いに反転図形の関係にあるならば、認識論的障害に認められる普遍性は、そのまま物質的イメージの普遍性をも示すことになるはずである。すなわち物質的イメージは、バシュラールが詩的イメージを単に恣意的に分類したものではなく、認識論の枠組みの中で普遍的位置を占める認識論的障害と対応するものであり、それに相応するだけの普遍性を持つものとして理解されるべきものなのである。

バシュラールは、自然探求の過程で現象する認識論的障害としてのイメージの研究を通じて、そこに四元素のイメージを発見し、それらがまたある種の詩的イメージの中に共通して認められるということをも発見したのである。そして四元素としての物質的イメージこそが優れた詩的イメージに共通する特徴であるということも確信したのだ。こうして科学的認識論において否定的に捉えられていたイメージが、詩的な想像力の世界においては物質的イメージという積極的な美的価値をもつものとして復活させられたのである。

## 註

- 1) 物質的想像力については既に数多の論者が言及していることは言うまでもない。美学関連の著作においても少なくないが、物質的想像力の概念が十分説明されているとは思えないので、本稿の試みをする次第である。

物質的想像力に言及した主要な参考文献を以下に記す。

竹内敏雄編、『美学事典』、弘文堂、1974、pp.580-581、当該箇所の執筆者は杉野正。

想像力と物質的存在との関わりを指摘し、四元素が詩人の想像力に働きかけることによって詩的イメージが形成される旨を述べている。これだけでは物質的想像力の何たるかを理解するのは困難であろう。

佐々木健一、『美学辞典』、東京大学出版会、1995、pp.85-86。

佐々木は想像力を扱った章において、物質的想像力をめぐるバシュラールの思想が、西洋思想において「思想の身体的位相を捉えたほとんど唯一の思想である」として高く評価しており、物質的想像力への関心が高められる。

山縣熙、「バシュラール研究——科学的認識と詩的認識」(美学会編『美学』90号、1966、pp.33-42)。

山縣はバシュラールの認識論と晩年の詩論『夢の詩学』とを対照させた興味深い議論を展開している。物質的想像力を主題としているものではない。

金森修、『バシュラール 科学と詩』(現代思想の冒険者たち 5)、講談社、1996。

日本語で書かれたもっとも包括的なバシュラールについての概説書であり、その中には物質的想像力を扱った章もあり、またバシュラールの詩論として後期の「現象学」ではなく(p.249)、物質的想像力の時期のそれを最も高く評価している。

松岡達也、『バシュラールの世界』、名古屋大学出版会、1984。

これはバシュラールの詩論をもつばら扱ったもので、その点に関しては包括的である。さらにバシュラールをサルトルやメルロ＝ポンティと比較しながら論じており、その点、参考になる。

青柳晃一、「ガストン・バシュラールにおける「物質的想像力」の概念」、『比較文学研究』第8号、1964、pp.91-122。

日本においてバシュラールを紹介したきわめて早い時期の論文であり、『火の精神分析』以降の想像論を追跡した大作である。ただ著者によれば、「想像力を物質的想像力と形式的想像力に分けることが、

## 物質的想像力と認識論的障害

哲学的見地からみてどれほど妥当なものであるかを論ずることは、ここでの主題ではない」(p.105)。上記の論者たちはいずれも物質的想像力という言葉を使しながら詩やイメージについて論じてはいるが、物質的想像力が何かという問いかけに対して端的に答えているようには見えない。彼らにとって物質的想像力は既に自家業籠中のものとなっているのかもしれないが、その前に、物質的想像力についての解りやすい説明が望まれるところである。これらに対して、以下に挙げる二論文は、物質概念を実体概念として理解するという立場を示しており、興味深い。

及川馥、「バシュラール『水と夢』における「実体」の問題」、『人文学科論集』16号(人文・社会編36巻12号)、茨城大学人文学部、1983、pp.143-181。

この論文は『水と夢』を読解したものであるが、はじめに、物質的イメージの物質概念と『科学的精神の形成』における実体概念との類似性に注目しており、われわれと問題意識を共有している。なお、この論文は、次の単行本においても読むことができる。及川馥、『バシュラールの詩学』、東京、法政大学出版局、1989、第二部第一章。

鬼頭金剛、「バシュラールの想像力論について」、『仏語仏文学研究』(人文・社会編35巻05号)、中央大学仏語仏文学研究会、1982、pp.179-214。

この論文にも、物質と実体を同一視する指摘が見られる(p.189)。

- 2) “force imaginante” をここでは「想像する力」と訳したが、これは“imagination”を「想像力」と訳したことを意識してのことである。“imagination”の訳語は、慣例に倣って「想像力」としたが、“force imaginante”のような用語法があるのであれば、“imagination”は「想像」もしくは「想像作用」という訳語をあてる方がよいかもしれない。ここではこれを指摘するに止める。
- 3) 四元素が春夏秋冬という季節に結びつけられるというのは、パノフスキーによるデューラー研究などにも見られるように、よく知られた事実であろう。また人類の歴史全体にわたって物質的想像力は大きな影響を与えてきたということであろうか。
- 4) BACHELARD, Gaston, *L'eau e le rêve*, 1 ed., Paris: José Corti, 1942 (rep.1989), p.1.  
本稿で引用されているバシュラールの著作にはそれぞれ邦訳があり、参考にしたが、本文中の訳文はすべて筆者の訳であり、訳語など邦訳書とは異なる点も多い。本書の邦訳は次の通り。ガストン・バシュラール、小浜俊郎・桜木泰行訳、『水と夢』、東京、国文社、1969。
- 5) アリストテレス、『形而上学』に見られるような議論。
- 6) BACHELARD, Gaston, *Le rationalisme appliqué*, 1 ed., Paris: PUF, 1949, p.102.  
ガストン・バシュラール、金森修訳、『適応合理主義』、国文社、1989。
- 7) BACHELARD, Gaston, *La formation de l'esprit scientifique*, 1 ed., Paris: Librairie Philosophique J.Vrin, 1938 (rep.1993), p.5.  
ガストン・バシュラール、及川馥・小井戸光彦訳、『科学的精神の形成』、国文社、1975。
- 8) Ibid..
- 9) Ibid., p.8.
- 10) Ibid..
- 11) Ibid..
- 12) Ibid., p.19, p.23.
- 13) Ibid., p.23.
- 14) Ibid., p.62.
- 15) Ibid., p.63.
- 16) BACHELARD, *L'eau e le rêve*. 血については、第II章第V節。乳については、第V章において。

- 17) BACHELARD, *La formation de l'esprit scientifique*, p.55.
- 18) Ibid., p.97.
- 19) Ibid., p.102.
- 20) Ibid., p.108.
- 21) Ibid., p.109.
- 22) Ibid., pp.109-110
- 23) BACHELARD, *L'eau e le rêve*, p.204. 第VII章において。
- 24) BACHELARD, *La formation de l'esprit scientifique*, p.99.
- 25) Ibid., p.101.
- 26) Ibid., p.98.
- 27) Ibid., p.155.
- 28) Ibid., p.97.

本稿は平成13～16年度文部省科学研究費補助による基盤研究A「四大（地・水・火・風）の感性論」（代表：京都大学文学研究科教授 岩城見一）の研究成果の一部である。